資料

ベーベルの女性論再考（第2報）
Die Frau und der Sozialismus における人口と女性
—「ゲリッツエン女性史コレクション」を利用して—

伊藤 セツ

Materials

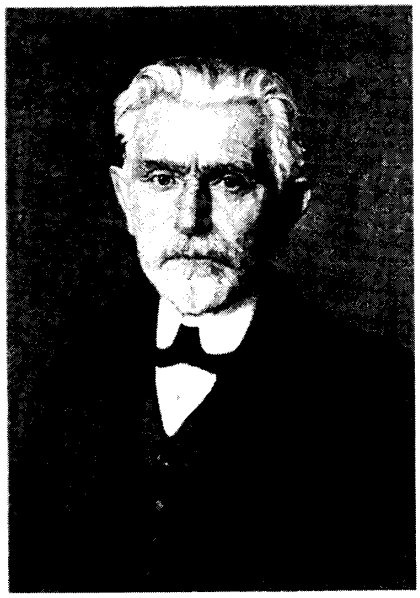
Reconsideration on Women's Emancipation Theory of August Bebel
Part 2　Population and Women in *Die Frau und der Sozialismus*
—Using "The Gerritsen Collection of Women's History, 1543-1949"

Setsu Ito

はしがき

Bebel, August（1840-1913，以下ベーベルと記す）の *Die Frau und der Sozialismus* は，1879年の初版以来，1883年の第2版で小修正，1891年の第9版，1895年の第25版，1902年の第34版，1909年の第50版と4回大幅な改訂が行われた。本学所蔵の「ゲリッツエン女性史コレクション」には，その1883年の第2版（D183）そのもの，1895年改訂の内容を伝える1900年発行の第31版（D184），1909年改訂の50版（D185）が収録されていることは，既報（伊藤　1992）ですでに詳しく述べたところである。

ベーベルの研究は，今日盛んとはいえないが，しかし，ドイツ統一後の1994年，ベルリンのDiets 出版社から，1983年以来途絶えていたベーベルの選集（既刊1，2，6巻）が継続発行され始めた（1994年は3，4，5巻を発行。以後9，7，8巻の順で刊行予定。ただし1995年には刊行はなかった。）し，1911-1914年にシュツットガルトで出だされた初版の *Aus meinem Leben*（第1部－第3部，3巻本）が，古書ルートで市場に出回ったりしている。前者は，私が1983年以来長い間待ち受けていたものであり，後者もこれまで初版本を所持していなかったので，1995年にこの両者を入手できたのは幸いであった。選集の継続刊行が10年以上を経て統一ドイツで行われ始めたことは，今，ベーベルの新たな視点での研究が必要であることを示唆しているように思われる。



Nach einem Gemälde von Georg Tronnier
ベーベル『わが生涯』初版 第3部 1914年より

本誌に，資料「ベーベルの女性論再考」（第1報）を執筆して以降，*Die Frau und der Sozialismus* の「序文の変遷」を追って翻訳していたが（伊藤　1994），今回は，ベーベルが，

1879年以来一貫して女性と人口の問題を考察していたことに注目して，この問題に関連する叙述がどのように書き変えられていったかを検討することとする。1891年改訂は，「ゲリッツエン女性史コレクション」には入っていないが，これまでのように，東京都立立川短期大学図書館の金子鷹之介文庫に収集されているものを用いる。また，同コレクションには，1902年改訂のドイツ語版は入っていないので（英語版で1904年のA191はあるが，何版からの英訳か明記していない），1883，1891，1895，1909年の4時点のみをみることにする。1909年改訂版については，伊東・土屋訳を主として用いたが，die Erau の訳は，「婦人」から「女性」に改め，またその他もわかりやすい表現に改めた。原文”　”で囲んだ単語は「　」を用い，強調語はゴシック体とした。改訂版で新しく加えられた文言のうち，重要なものには下線を付した。

今回，特に人口問題に注目した理由は，1994年9月カイロで国際世界人口会議が開催され，人口問題を取り上げる視点に「女性」がクローズアップされたことにある。また，1993年4月から1995年4月まで，筆者は内蒙古からの留学生，烏雲娜を修士課程の院生として受け入れ，「開放経済下の中国の女性人口問題と家族」というテーマで指導した。人口問題が女性問題の一つであることは今日では明白であるが，人口論の中で人口と女性を結びつけて論じた人口論の古典は見あたらない。しかし，上述のようにベーベルだけは違っていた。このことに着目して1879年以来ベーベルがどのように人口と女性を結びつけてきたかを追い，今日の視点からその論点を検討することとしたのである。

1，ベーベルの人口論

(1) *Die Frau und der Sozialismus* における人口論の位置

ベーベルの *Die Frau und der Sozialismus* は，初版と内容が殆ど同じといわれている1883年の第2版から，一貫して最終章は「人口問題」であった。かねてから筆者はこのことに注目していた。1883年版は，「過去の女性」，「現在の女性」，「将来の女性」と3部構成であったが，そこでも最後の「将来の女性」がさらに「国際関係」と「過剰人口」に分かれている。

1895年の第25版は，「将来の女性」から独立して，「国際関係」，「人口と過剰人口」という部が分かれてそれぞれ1つの章をなしている。最後の改訂版1909年の第50版は，「過去の女性」，「現代の女性」に続いて「国家と社会」，「社会の社会化」という独立の柱がたち，「社会の社会化」に納められた11の章のうち，最後の3つが，「将来の女性」，「国際関係」，「人口問題と社会主義」となっている（表1）。

(2) 最終改訂（1909年版　D185）によるベーベルの人口論と女性

邦訳もある最後の版からとりあげることにする。最後の50版，1909年版では，第30章　人口問題と社会主義　は，次の5節からなりたっている。すなわち，1，過剰人口にたいする恐れ，2，過剰人口の生産，3，貧困と出産力，4，人間の不足と食糧の過剰，5，社会関係と増殖力（Vermehrungsfähigkeit），である。最後の5，に社会関係の一要因として女性の地位と人口問題が扱われるのである。内容を要約してみたい。

1，過剰人口にたいする恐れ，では，これまでの歴史に現れた「過剰人口」問題への恐れを歴史的に追い，それを一般化して，「過剰人口への恐れは，つねに，目前の社会状態が崩壊しかけている時期に現れる。そうした時期に生じる全般的不満は，生活資料の獲得と分配の仕方のせいによるのではなくて，なによりもまず人間の過剰と生活資料の不足のせいであるにきま

表1 *Die Frau und der Sozialismus* の各版における「人口」の位置

D183 1883 第2版	金子文庫版 1891 第10版	D184 1900 第31版	D185 1909 第50版
過去の女性	過去の女性	過去の女性	過去の女性
現在の女性	現在の女性	現在の女性	現在の女性
将来の女性	将来の女性	将来の女性	国家と社会
国際関係	国際関係	国際関係	社会の社会化
過剰人口	**人口と過剰人口**	**人口と過剰人口**	⋮
			略
			将来の女性
			国際関係
			人口と社会主義

付言するが，ベーベルの女性論全体をみれば，人口問題に関連するのは，この終章だけではない。「現在の女性」の中で，出産率（Fruchtbarkeit），出生率低下（der Rückgang der Geburten）の問題をとりあげているのが目に付く。（D183）においては，統計数字が豊富ではないが，改訂ごとに次第に統計表が増え，（D185）にいたるまで，丹念に新しい数字を追加していく様子が見られる。（D185）では，出産率の現象をフランスを例に叙述し，婚姻出産率と婚姻外出産率とを区別して，婚姻出産率が，1801年に住民1万人あたり333人であったのが，1907年には197人に減少したと説明している。ベーベルはいう。「出産数の減少は，全世紀を通じる顕著な特徴である」と。ここでは，女児の間引きの問題についても短くふれている。表2は，（D184）ではじめてベーベルが示したヨーロッパの出産数の推移である。

表2 ヨーロッパ主要国の出産数の推移を示すベーベルの初めての表（D184）p.106

ein ähnliches Bild. So kamen Lebendgeborene auf je 10000 Einwohner in den

Staaten	Im Zeitraume von 1865—1867	und 1886—1888	Abnahme	Zunahme
Irland	262	231	31	—
Schottland	353	313	40	—
England u. Wales . .	353	314	39	—
Niederlande	388	344	44	—
Belgien	320	293	27	—
Schweiz	320	278	42	—
Oesterreich	374	380	—	6
Ungarn	399	445	—	46
Italien	378	371	7	—
Schweden	320	297	23	—
Norwegen	344	308	36	—

っていると人は思うのである」との見解を示している。「過剰人口」への恐れは，ギリシャ人やローマ人，中世末期，そしてマルサスへ受け継がれていく。ベーベルは，「マルサスの出現は，ハーグリーヴズやアークライトやワットの新発明の結果，イギリス産業に機械と技術の強力な変革のおこった時期，主として綿業とリンネル工業において変革がおこなわれて，これらの家内工業に従事していた労働者を何万人も失業させたあの時期に，あたっている」と説明する。

2，過剰人口の生産，の節では，マルサスが出現した時期のヨーロッパとアメリカを例にとって，資本主義的生産様式がもたらした矛盾，すなわち，資本と過剰人口の状態を描き出している。

3，貧困と出産力では，貧困は，資本主義経済制度のもとでは，食料や生活資料の不足の結果ではなく，それらのものの不平等な分配によるとベーベルは説明する。当時の経済学者たちが，資本主義にたいして社会主義経済体制の下では人口問題はどのような様相をおびるとみていたかについてベーベルは，ジョン・スチュアート・ミルを引いて，「共産主義的組織は過剰人口の危機をもたらすという反対論はけっしてあたらない。それはむしろこうした弊害をいちじるしく防止する傾向をもつという長所があるのである」(『経済学原理』第2編第1章3) といい，アドルフ・ワグナーは，「社会主義共同体においては婚姻の自由ないしは産児の自由は原則としていちばん許されそうにない」(『政治経済学教科書』376頁) と言ったと引用している。ベーベルは，これについて「二人は，人口過剰の傾向はすべての社会状態に共通であるという見解から出発しているが，しかし，両人とも，社会主義が他のいかなる社会形態よりも人口と食料との関係に適正なつりあいをもたらしうる性質があるとのあかしを立てている」と説明している。

貧困と資本主義・社会主義とのかかわりで述べられるこれらの人口論は，今日の資本主義や社会主義の現実と比較してみると興味深い。さらに当時「恋人選択の自由のある，万人に人間らしい生活の与えられた社会主義は『家ウサギ小舎』になるであろう。そこでは人びとは放縦きわまりない性的享楽と子供の大量生産とのとりこになるだろうからである」と言われていた。しかし，ベーベルは，これとは反対であり，子供の数が多いのは極貧層であることを指摘し，マルクスも『資本論』の中で，「家族の絶対数もまた，労賃の高さに，つまり，いろいろの種類の労働者が手に入れることのできる生活資料の分量に逆比例しているのである」と書いていることに言及している。サミュエル・レイングは，「もし，万人の境遇が安楽なものになれば，やがて世界の人口は減るであろう」，ハーバード・スペンサーは，「人類に期待されるいっそうの発達の結果は，おそらく人類の繁殖の減少であろうと推測される」と言ったとしている。

4，人間の不足と食料の過剰　では，ベーベルは地球上の土地や海洋，科学の発展に注目し，「近い将来には，およそ過剰人口なるものにたいする恐れは意味がなくなるだろう，という一言でもって，人口問題全体をかんたんにかたずけてしまってもいい」という見解に立つ。その理由はこうである。「**本質的**にいっそう高い文化目的がはたせるようになるには，ヨーロッパでは，こんご久しきにわたって人間の過剰ではなくて，むしろその不足がおこる。だからこうした状態のもとでそもそも過剰人口について恐れおののくなどというのは，馬鹿げている。と同時に，科学と労働を充用すれば，現存する食糧資源の利用は**まったく無限になるということ，食糧をつくるもとを増加させる新しい発明発見**

が日ごとにもたらされているということを，つねにわすれてはならない」「ヨーロッパから他の大地に目を転ずれば，**人間不足と土地過剰がさらにいっそう明らかに**なる。土地のもっとも肥えたもっとも豊かな国土が，まだまったく，あるいはほとんどまったく利用されずにある。というのは，数千人ぐらいの人間をもってしては，その開拓と利用に着手できないのであって，**豊かに過ぎる自然をほんのなにほどかでも制しうるためには，何百万人という大量植民が必要とされる**からである」。ここでのヨーロッパ以外の地とは，中南米，アフリカ，アジア，北アメリカ合衆国，カナダであった。

ベーベルによれば，問題は，「人間の余剰」ではなく「人間の不足」であった。

ベーベルは「文化的使命のすべてに同時に手をつけなければならぬとすれば，**人間があり余るどころか，足りなすぎることになろう**。人類は，ゆくてに待っている使命のすべてをはたすためには，なおおおいに増殖しなければならない。耕地も最大限に利用されてはいないし，**地表のほぼ4分の3には，これを耕作しうるだけの人間がおりもしない**。こんにち資本主義制度によってたえず生みだされて労働者と社会に害をおよぼしている相対的過剰人口は，**いっそう高い文化段階にあっては，一つの恵みであることが明らかになるであろう**。できるだけ多い人口は，文化の進歩の障害となるものではなく，その一手段となるものである。しかも，それは，あたかも現下の商品と生活資料の過剰生産，近代産業における女性と児童の充用によってひきおこされる婚姻の破壊，大資本による中間層の収奪がそうであるように，いっそう高い文化段階に到達する前提条件となるものである」とも言っている。

5，社会関係と増殖力においては，ところで「人間は勝手放題に増殖するものなのか，そしてまた人間はそういうことを欲するものなのか？」という問題提起がなされる。これについては諸説がありどれも確たる結論が得られてはいないが，ベーベルは，「生活条件の変化と，それからおこる生活様式の変化が，増殖力の増減に決定的なものである」ことは証明されているとしている。こうした文脈の中でベーベルは，女性の地位を人口増減の重要な要因としてクローズアップするに至る。その箇所を全文訳出する。

「人口問題では，将来，一つの要因が決定的に重要になるであろう。その要因とは，女性が将来例外なく占めるであろう，いっそう高い，いっそう自由な地位である。知的で活動的な女性は――例外は別として――，『神のおぼしめし』としておおぜいの子に命をあたえ，女性の人生の最上の時期を妊娠していたり授乳中の子どもをかかえて過ごすことを普通好まない。現在ですらすでに，おおかたの女性は子だくさんをいやがっているが，この気持ちは，社会主義社会が妊婦と母親にどんな配慮をささげても，弱まるどころかむしろ強まるであろう。そしてこの点から，社会主義社会では人口増加はブルジョア社会でよりもいっそう緩慢になる公算が大だと考えるものである」。

崩壊前の東欧社会主義国では，確かにベーベルのこの予言は的中した。しかし，中国は，1970年代後半までその逆であった。毛沢東は，人口増加に対して楽観主義的立場に立っていた。この毛沢東の楽観主義に，当時の北京大学学長馬寅初が『新人口論』で異議を唱えて，追放された事が知られている。その後1979年以降今日も続く人口抑制政策下では，出産率は押さえられたが，それは，ベーベルがいうような「いっそう高い，いっそう自由な」地位を社会主義が保障したからではなく，また，「妊婦と母親に配慮」をささげたにもかかわらず，というので

もない。しかし，ベーベルは，他の人口論者が問題にもしなかったこと，つまり，女性と人口を関連づけたのである。この点の変遷を上述4つの時期を追って見ていくことにする。

(3) 女性と人口の関連についてのベーベルの叙述の変遷

1883年の（D183）では，人口問題を扱う終章は節には区切られていない。区切られたのは，上述の最後の版1909年版であった。しかし，（D183）でも，（金子文庫版）でも，（D184）でもすべて，表1で示したとおり，この章の末尾に近い部分に女性と人口の叙述が記されている。（D183）の全文は次の通りである。

「ついにわれわれは，将来の社会において，女性の地位は全く異なるであろうということ，女性は『神のおぼしめし』としておおぜいの子に命を与えたくはないということ，彼女たちの自由と自立を享受し，彼女たちの人生の最上の時を妊娠していたり，授乳中の子どもをかかえてすごすことを普通好まないということに，注目するにいたるだろう。たしかに，子どもをほしがらない女性は非常にわずかしかいない。しかし，他方，多くのものは（meisten），今以上にそれほど子どもを多くをもつことを望まない。これらすべてを考慮すれば，現在のマルサス主義者が頭を悩ます必要なしに人間の数を調節することに貢献することになろう。その結果，健康をそこなう節制や，不快な予防措置をしなくても可能になるだろう」（pp.213-214）。（D183）の原文を以下に示す。

Beachten wir endlich, dass die Stellung der Frau eine gänzlich andere in der Gesellschaft der Zukunft wird, dass sie nicht gewillt sein dürfte, einer grossen Zahl von Kindern als „Schickung Gottes" das Leben zu geben, dass sie ihre Freiheit und Selbstständigkeit geniessen und nicht die Hälfte oder Dreiviertel ihrer besten Lebens-

以上　D183, p.213

jahre im Schwangerschaftszustande oder mit dem Kinde an der Brust verbringen will. Sicher gibt es sehr wenig Frauen, die kein Kind wollen, andrerseits aber wünschen die meisten über eine mässige Zahl hinaus solche nicht zu besitzen. Alles dies zusammengenommen, wird dazu beitragen, ohne dass sich unsere Malthusianer gegenwärtig die Köpfe zu zerbrechen nöthig haben, die Menschenzahl zu reguliren. Es wird dies schliesslich ohne gesundheitsschädigende Enthaltsamkeit, ohne widerliche Präventivmassregeln möglich sein.

以上　D183, p.214

これが，1891年，金子文庫版では次のようになる。

「ついにわれわれは，将来の社会において，女性の地位は全く異なるであろうということ，女性は『神のおぼしめし』としておおぜいの子に命を与えたくはないということ，彼女たちの自由と自立を享受し，彼女たちの人生の最上の時の半分や4分の3をも妊娠状態や乳呑子をかかえてすごすことを普通好まないということに，注目するにいたるだろう。たしかに，子どもをほしがらない女性は非常にわずかしかいない。しかし，他方，大部分（allermeisten）のものは，今以上にそれほど子どもを多くをもつことを望まない。これらすべてを考慮すれば，現在のマルサス主義者が頭を悩ます必要なしに人間の数を調節することに貢献するだろう。調節は，健康をそこなう節制や，不快な予防措置をしなくても可能になるだろう」（pp.371-372）。

序文を検討（伊藤　1994）したときと同じく，この両時点では，叙述に基本的に大きな相違は見られない。（D183）も（金子文庫版）もこの部分は，特に強調箇所もなく淡々と書かれている。異なるのは下線を引いた部分ぐらいで，強いて言えば，女性たちが妊娠したり授乳で人生の最良の時期のどれぐらいを悩まされるかその期間を金子文庫版では，具体的に数字で示している点である。その他は，文法的主語の挿入などである。両者には，（D185）に見るような，将来の社会を「社会主義」としてその政策との関係に言及するというくだりはみられない。

（D184）は，（D185）に近づく。（D184）の「人口と過剰人口」と題する章は，これまでの版同様まだ節には別れていないが，叙述内容は（D185）とほぼ同様である。女性と人口に関連する箇所は次のようになる。

「人口問題では，将来，一つの要因が決定的に重要になるであろう。**その要因とは，女性が将来例外なく占めるであろう，いっそう高い，いっそう自由な地位である。**知的で活動的な女性は――例外は別として――，『神のおぼしめし』としておおぜいの子に命をあたえ，女性の人生の最上の時を妊娠したり，授乳中の子どもをかかえてすごすことを普通好まない。現在ですらすでに，おおかたの女性は子だくさんをいやがっているが，この気持ちは，社会主義社会が妊婦と母親にどんな配慮をささげても，弱まるどころかむしろ強まるであろう。そしてこの点から，**人口増加はブルジョア社会でよりもいっそう緩慢になる公算が大だと考えるものである**」。（p.461）

ここでは，3カ所の強調の印が見られる。また，それ以前の叙述に，将来の展望においては，社会主義が具体的にどのような施策をしても女性が子だくさんをいやがるのは変わらないものだという指摘が加わる。（D184）の原文を下に示す。

Bekannt ist ferner, daß Pflanzen, in gutem Boden und fett gedüngt, wohl üppig gedeihen, aber keinen Samen ergeben. Daß die Art der Nahrung auch auf die Zusammensetzung des männlichen Samens beim Menschen, wie auf die Befruchtungsfähigkeit des weiblichen Eies einwirkt, kann kaum einem Zweifel unterliegen, und so dürfte wohl von der Art der Ernährung die Vermehrungsfähigkeit der Bevölkerung in hohem Grade abhängen. Andere Faktoren, die in ihrer Natur noch wenig bekannt sind, spielen ebenfalls eine Rolle. Auffallend ist z. B., daß ein junges Ehepaar trotz langjähriger Ehe

keine Kinder besitzt, aber nachdem das Ehepaar sich trennte und jeder Theil aufs Neue sich wieder verheirathete, in beiden Ehen sofort sich gesunde Kinder einstellen.

Eins ist in der Bevölkerungsfrage in Zukunft von ausschlaggebender Bedeutung. Das ist die höhere, freiere Stellung, welche unsere Frauen ohne Ausnahme alsdann einnehmen. Intelligente und energische Frauen haben — von Ausnahmen abgesehen — in der Regel keine Neigung, einer größeren Anzahl Kinder, als einer „Schickung Gottes", das Leben zu geben, und die besten Lebensjahre im Schwangerschaftszustande oder mit dem Kinde an der Brust zu verbringen. Diese Abneigung gegen zahlreiche Kinder, welche sogar die meisten Frauen gegenwärtig schon hegen, dürfte sich ungeachtet aller Vorsorge, die eine sozialistische Gesellschaft den Schwangeren und Müttern widmet, eher verstärken als vermindern und liegt hierin unseres Erachtens die große Wahrscheinlichkeit, daß die Bevölkerungsvermehrung langsamer als in der bürgerlichen Gesellschaft vor sich gehen wird.

D184, p.461

なぜ，ベーベルの女性論が1879年当時から人口と女性の関わりで終わっていたのであろうか。西暦0年には，約3億人と推測される世界人口が，10億になったのは1804年，20億になったのは1927年と言われる。30億人になったのは1960年，そして，1998年には60億人に達することが予測されている。ベーベルの女性論は，大きな背景としては世界人口が10億から20億に増加するプロセスで書かれている。過去，現在，未来を視野に置いたベーベルは，歴史的に女性の地位を叙述し，現在にいたって問題別に分析する中で，人口の半分を女性が占めているという事実を強く認識したに違いない。ヨーロッパ主要国を主な分析の対象としたベーベルには，人口の増加よりは，統計に現れる婚姻内出産率の低下が，社会問題として，また女性の地位とのプラスとマイナスの両面からの関わりで目に映った。これは，後述する「人口転換期」という時代減少を背景に感じさせる。その後に継続する人口増加への警告はベーベルには見られない。その点は，ベーベルよりさらに1世紀前のマルサスとは対照的である。

2，当時の古典的人口論の中でのベーベルの位置づけ

まず，人口とは国家など一定地域において居住・増減する人間集団を数量的に把握した概念である。人口法則とは，それぞれの時代の社会における人口の構成・大きさおよびその変動を決定している法則のことである。

この法則を明らかにするのが人口学説であるが，たとえばマルサス（Malthus, Thomas Rodert 1766-1834）は，人口は幾何級数的にふえるが食糧は算術級数的にしかふえないという「人口法則」が社会の貧困の原因だと説いた。マルサスはこの人口法則を，あらゆる時代にあてはまる自然法則とみなした。それに対して，マルクス（Marx, Karl 1818-83）は，それぞれの社会体

制において異なった内容をもつ歴史的な法則であると考えた。人口問題とは，社会問題としての過剰人口の問題であることを主張したのはマルクスであったが，人口は直接的には結婚や出生力が関係する。この理論の延長上に人口の問題に，社会問題としての女性の地位が関連することを指摘したのがベーベルであった。他方新マルサス主義は前述マルサス主義の一変種として，産業資本主義が帝国主義に時代にさしかかる19世紀の後半によみがえる。ベーベルの人口論の特徴を考察するために，当時のこうした人口論を，一部既発表論文（烏雲娜，伊藤　1995）と重複するが概略的に追ってみる。

1，マルサスの人口学説：人口論は古代ギリシャに始まる。しかし，人口をそれ自体として取り上げたのはマルサスである。彼は『人口の原理に関する一理論』（いわゆるマルサスの『人口論』1798）第1章のなかで人類は幾何級数的に増加する（1，2，4，8，16，32，等々）傾向があり，これに反して食物は算術級数的に（1，2，3，4，5，等々）しか増加しないといった。こうした食糧と人口のギャップは自然法則であるから，貧困対策としては救貧法より人口の道徳的制限（具体的には結婚の延期）が大切だと説いた。

マルサスの人口理論の弱点に対しては多くの批判があるが，西川（1994）はそれを次の3点にまとめている。第1は，マルサスは人口増加を「出生率の増加」と解釈して「出生の抑制」を説いたが，産業革命後起こったイギリスの人口増加は，出生率の増加によるものではなかった。変化したのは死亡率であった。経済成長とともに死亡率が下がり，それが人口増加を招いたのであり，人口増加は経済成長とあいともなう現象である。第2は，当時のイギリスの人口増は食糧生産によってカバーできないほどの増加ではない。マルサスは，囲いこみによって追い出された農民たちが都市に堆積した人口集中を目にしたのであり，これは「自然法則」よりは，「社会法則」の問題であった。第3に，人口と食糧の関係を固定的にとらえていた。マルサスは，農業の収穫逓減を自明の理としたが，イギリスの工業化により農業の生産力はあがり，経済の開放化によりイギリスは海外から食糧を獲得した。

マルサス主義とは，総じて，社会問題の根源を人口増大あるいは現象にもとめる見解をいい，ここでは，人口とジェンダーの関係は無縁である。

2，マルクスの人口論：過剰人口を人口の増大にもとづく超歴史的なものとするマルサスの人口論に対して，マルクスは，『資本論』第1巻（1867）のなかで資本がその蓄積過程で相対的過剰人口を生み出すと説明し，それを資本主義的生産様式に特有な人口法則であるとした。

マルクスのいう相対的過剰人口とは，資本の蓄積が必要とするのに比べて余分な労働者人口で，失業者・半失業者のことである。資本主義のもとでは，生産力が増大するにつれて，労働力にたいする需要が相対的に少なくなる。しかし，労働者人口は，自然的・社会的に増加するので，労働者人口の一部は資本の蓄積が必要とするのに比べて相対的に過剰になり，相対的過剰人口が生まれるという説である。

マルクスは，相対的過剰人口には，流動的・潜在的・停滞的過剰人口があり，底辺に貧民層があるとして，資本主義に固有な人口法則を説明したのである。この見地からすれば，「過剰人口」は資本主義社会に内在的な現象であって，資本主義社会のメカニズムを変えれば人口問題は解決することになる。マルクスは人口問題を社会体制の問題内に限定した。また，マルクスは，一国の閉鎖的モデルを対象としていたために，先進国での資本の蓄積と開発途上国での人

口の関連を展望しなかったとの批判もある（西川　1994)。この批判は，主にヨーロッパを対象としたベーベルにも拡大して当てはまる。

3，新マルサス主義：マルサスの人口論から1世紀を経て，19世紀後半から20世紀に入るとヨーロッパの出生率は低下し，人口増加率は減退した。また死亡率も減少した。こうした人口現象は「人口革命」とも「人口転換」とも呼ばれ，人口学説にも影響を与えて，マルサス主義に疑問がむけられることになった。この時代は，資本主義が帝国主義の段階に入った時代で，貧富の差が広がり社会的不安が増大した。

こうした時代に，マルサス主義の新たな形態として小市民層の間で，生活不安からのがれるために，産児制限による人口抑制が主張された。また，多産多死から少産少死への移行を超社会体制的に近代化への過程であるとの説明がなされた。これは，植民地および従属国における社会的貧困の増大の原因を人口の絶対的過剰にもとめ，出産制限が有力かつ必然的な解決の武器になるという理論である。これが，新マルサス主義である。マルサス主義と新マルサス主義は，それぞれの背景となる時代の人口の急激な増加を抑制しようとするものであった。既述のように，ベーベルの人口論はこのような時期に現れた。

ベーベルの没年にあたる1913年に，レーニンは，「労働者階級と新マルサス主義」という論文を書いて，新マルサス主義のよって立つ階級的背景を指摘し，「堕胎を追訴するあらゆる法律の無条件廃止を要求し，または避妊措置にかんする医学書の普及などに賛成」しはするが，「医学的宣伝の自由および男女市民の基本的な民主主義的諸権利の保護と，新マルサス主義という社会学説とは別のものである」と主張した。

ヨーロッパ先進国の「人口転換」と並行して20世紀後半から，開発途上国の人口急増が起こった。これは，「人口爆発」と呼ばれている。ベーベルはこの現象には触れていない。人口急増は開発途上国の経済発展をさまたげ，住民の生活水準を低下させる要因となっているということで，マルサス・新マルサス主義の考え方に沿った論議は開発途上国人口問題について今日も続いている。

社会主義中国では，毛沢東は「人口は生産力」であるとして人口増加政策をとったことが知られている。しかし，当時の生産力水準では，過剰人口を生み出し，今日みるような人口抑制政策へ転換させずにはいられなかった。

3，国連人口会議にはじまる最近の人口論との関わりでみたベーベル

最近では，国際的には国連の人口会議に始まるさまざまな人口論と論争がある。今日では，人口問題は，開発・環境やフェミニズムの視点からとりあげられ，リプロダクティヴ・ヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康と権利）というキーワードに示される女性の人権と結びつけて論じられるようになった。また，歴史学・統計学を母胎に成立した人口学（Demography）は，人口自体を専門対象とする学際的研究領域である。ベーベルの位置を考察するために，こうした人口論と最近の人口論の動向を追う必要がある。

1994年9月，カイロで開催された第3回国連人口・開発会議（第1回は1974年ブカレスト，第2回は1984年メキシコ）は，女性の地位の強化（エンパワーメント）こそが人口問題解決の鍵であると強調した。人口会議で採択された「行動計画」は，人口問題の解決に性別間の平等と女性の地位の向上が重要である事を明らかにしている。これまでの人口論における支配的見解は，人口現象は社会的経済的要因に規定されるというものであったが，1980年代になると人口

問題の解決のためには，女性の役割の拡大と地位の向上こそが鍵を握っていると考えられるようになった。

この会議を受けた国連人口基金『世界人口白書　1995』も，「女性，人口そして環境の問題は密接に結びついているという認識がより高まってきている」（国連人口基金　1995　p.28）としており，人口問題の解決に，「男女間の公正，平等と女性のエンパワーメント」が必要であることを強調している（同書　p.3）。1995年，第4回世界女性会議（北京）で採択された「行動綱領」は，第4章重大関心分野のC，女性と健康で，女性の生殖と性に関する権利を認める事を唱っている（草案番号 98,採択後番号96）。

ベーベルが，1879年から指摘していたこと，彼の女性論の結論部分が現実のものとして，認識されるようになったのである。もちろん，この認識をベーベルの女性論と繋げて考察する理論家は世界中でもほとんどいない。そのことは，最近のフェミニストの人口と女性に関する多くの文献からも明らかである。

国連のジェンダー統計書 *The World's women 1995, Trends and statistics* は，最初の章は人口からはじまる（UN　1995）。ベーベルが，1879年以来，その女性論の最後尾に置き続けた人口問題が，今日では，女性問題の最初にクローズアップされるに至っている。こうして人口問題は21世紀に持ち越される最大の女性問題の1つと認識されている。

注

伊藤セツ 1992 ベーベルの女性論再考（第1報）『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』Vol.2，pp.95-102.

1994 アウグス・トベーベルの*Die Frau und der Sozialismus*「序説」の1883-1919の変遷『女性文化研究所 *Working Paper* No.8』

伊東勉・土屋保男訳 1958　『ベーベルの婦人論』大月書店

国連人口基金　1995『世界人口白書』

西川潤 1994 『人口』　岩波書店

UN　1995a *The World's Women 1995, Trends and Statistics.*

NU　1995b　Platforn for Action

烏雲娜・伊藤セツ 1995 人口抑制下での中国女性人口問題『女性文化研究所紀要』第16号